

審査の結果の要旨

論文提出者 松前もゆる

本論文は、社会主義からの政治体制の転換を経験した1989年以降の東欧社会の社会変動について、ブルガリアにおけるポマクと呼ばれるイスラム教社会を事例として取り上げ、民族とジェンダ - を手がかりとして民族誌的な記述によって分析したものである。

本論文は序章と3部6章および結論で構成されている。

序章では、東欧および旧ソ連における社会主義体制からの転換期における経済的・政治的側面について概観した上で、主として東欧を念頭に置いた民族とジェンダ - をめぐる研究レビュー - をおこない、それらが体制転換とどのように関連して浮上してきたかという本論文の課題が提示されている。

第1章ではポマクという社会範疇を取り上げ、近世以降の歴史的な背景を踏まえて、ブルガリア国家による対ポマク政策および地方行政において、国家がどのように民族を範疇化してきたかを検証している。

第2章では、地域社会の単位としての村に焦点を置き、村の空間利用に見られるポマクと正教徒との関係の変化、それと政治・経済体制との関連を考察しており、これらを通して村という場所が帯びる意味の重要性を指摘している。

第3章では、婚姻および親族のネットワークを分析して、ポマクとしてのアイデンティティがその出自と深く関係していることを確認した上で、新たな政治・経済状況においては自己の位置を再解釈することにより、近年ではそうした親族や婚姻に関わる実践にも変化が見られることを指摘している。そして、場所や関係性に応じて使い分けられる個人の名前や親族名称が、体制の転換による行動規範の変化に応じて変容をきたし、その結果、新たに分節化され実体化してきた村が、こうした名称表現を通して自分たちの空間として浮上してきたことを指摘している。

こうした議論を踏まえて、第4章では宗教的な実践に関して、第5章ではより日常的な衣装をめぐる実践について検討しており、その結果、こうした実践に関わる行為や語りにおいても、場所によるコードの新たな転換が計られていることを指摘している。つまり村という場所が、新しい行動規範に適った日常の実践を通して、ポマクの人々の参加・帰属の対象としての存在感を高めていることを明らかにしている。

第6章では、仕事に注目することで、政治・経済体制の変化が既存のジェンダ - 観念をどのように再編してきたか、またそれが民族的範疇とどのように結び付けて語られるかを検討している。

以上のとおり本論文は、ブルガリアの一地域におけるポマク社会を事例として、政治・経済体制の変化にともなう行動規範の変化が、人々の空間認識と民族的範疇やジェンダ・観念に及ぼした影響について、とくに村における日常的実践の観察・記述およびその語りの分析を踏まえて明らかにした点で、社会主義崩壊後の現代東欧社会の研究に大きく寄与するものと評価される。また、体制の転換や変化から受ける影響面ばかりなく、人々が日常レベルにおいて国家や世界の体制と対峙しながら、自身の生活空間をどのように主体的に維持しているかという課題に答えている点でも高く評価される。

新しいブルガリア国家においても、周縁に位置するポマクは国家によって創出され実体化された民族像やジェンダ・像を全面的に受け入れるのではなく、一面において受容しつつもこれを再解釈して改変し、あるいは場所に応じたコード転換によって対応してきたのである。また、社会主義の崩壊による体制転換期ばかりでなく、今日ポマクの人々がEU統合や市場経済の影響に晒され、さらに新たな体制への適応を迫られている中で、かれらが自己像を再構築してゆく諸相を記述・分析する上でも、有効な視座を提示したものといえる。

本論文は、歴史的な背景をはじめとして地域性や生業や宗教、あるいは社会主義や国家行政等にいたる幅広い分野にわたって蓄積を求められる現代東欧社会を対象としている点で得難い貴重な成果である。また、社会変動と民族アイデンティティを考察する事例として、周縁的なポマク社会を取り上げた点でもたいへん意欲的な研究である。しかも、理念面からばかりでなく日常の実践に注目することによって、生活の実像により近い視線から観察記述と分析をおこなった点も貴重である。それは、優れたブルガリア語の語学力によって達成されたばかりでなく、長期にわたる現地社会への参与の成果でもある。

社会主義時代、とりわけマイノリティに関する研究は制限されており、その後も今日に到るまで、現地研究者すらほとんどが短時間のインタビュー・調査に留まってきたことを考えれば、本研究は国際的にみてもきわめて稀少かつ優れた研究成果であり、文化人類学の分野に留まらず、地域研究としてのバルカン研究にとっても多大な貢献といえる。とりわけ、村の場の実践に注目する視点は、他のバルカン社会におけるエスニシティなどアイデンティティ研究にも広く適用できる可能性を示したものといえる。

なお、審査委員の一部からは、ポマクの村の多様性について、また話者の語りの記述・分析において状況の記述が必ずしも十分でないという指摘がなされた。また現地調査がどのようななされたかについても説明が不足しているという意見が出された。

しかしこうした指摘は、上記のような本論文の高い評価を覆すような大きな欠点とは見做されないという点で意見は一致した。

したがって、本審査委員会は本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。

: